經濟原論

135
U91

特271
135

帝國圖書館藏

發行所寄贈本

昭和十二年十四日 帝國圖書館

はしがき

去月七日、阿吽阿會館に於て阿吽阿第一に就き講演せし草稿に、今回少しく添削を施し、印刷して『阿吽阿經』に附錄として添へることにした。尙ほ他日『阿吽阿經』再版の節は、之を其の卷末に加へるであらう。

昭和十二年三月七日

冨岡俊次郎

第一　阿吽阿

智　無窮に彌り自由活動する唯一御存在。

自由は絶對御存在の御特性、御活動の所以に御存在す。

智　時空を様とする御存在。

活動は時間を充實す。時間を充實することは存在、空間は活動の様式。

智　有無を超越する御存在。

時間は無始無終、空間は無邊無涯、無始無終・無邊無涯は畢竟無。

智　御自愛御自處の妙動に因りて部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す。乃ち部分界萬有は、因果の御則に順ひて化易・推移し、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展・向上する所の根本智妙動の連鎖なり。故に萬有は、此の中和統齊の御道御愛と御因果則の妙に因りて推移・進展・向上して、遂に根本智に契合完全す。

智　個性不二。部分界の箇々は、極微も其の構成も、悉皆智性即ち智。是を以て箇々は必然活動す。箇々は箇々に必要の箇々欲、箇

箇機能を稟有す。箇々欲・箇々機能を賦けたる箇々は、智性たると與に個性。

箇々欲允に中和を得て智性明らかなる個性は、即ち全一の部分的顯現。

智性は、根本智を自覺し、靈界に感應し、箇々機能と協作用して對象を認識す。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊拜記

阿吽阿第一に就いて

「阿吽阿第一」は、絶對靈格自覺の概要であるがゆゑに、言語文字に依つては、到底詳かに表章し得る限りではないのである。況んや之を簡單に說明することは、無論不可能である。然るにそれを强ひて試みるに於ては、幾多疑惑を招く虞があるのであるから、最も愼重に考慮すべきものと信ずるのである。

此の如く「阿吽阿第一」は言語文字を以て說明することは、殆ど不可能に幾いのであるから、之を會得せんと欲する人は、其の說明を他人に求めず、先づ自ら經典「體認第七」以下を幾度も意義內容の納得出來るまで繰返し熟讀し、偏見を捨離し、愼で

内省すれば、經文「阿吽阿第一」に表せられたるが如く根本智を自覺し得る筈である。「阿吽阿第一」が、經典の卷頭に出てゐるがゆゑに、經典を攻究せんと志す人、先づ卷頭「阿吽阿第一」より順押しに始めても、忽ち難關に直面して、全體攻究の進歩を阻止することになるのである。之に反して前述の如く先づ「體認第七」以下を攻究して、其の體系概念を略々體得した後に、歸納的に「阿吽阿第一」を觀れば、會得し易き筈である。

如上の理由により、改めて同行者一般に對する予の希望は、『阿吽阿經』「禮讃謝第二」以下經文の解釋に就いては、自由に檢討論究し、共同の利益のために所謂切瑳琢

磨して、進展向上の道を坦にすることは可なるも、「阿吽阿第一」に就いては、他人のためにすると、自己のためにすると論せず、其の註釋論疏を一切遠慮し、經文を全然あるがまゝに保存し、行者各自は自己内省に由つて之を會得せられたいといふことである。

予は豫て此の心得でゐたので、一昨年講演せし時も、「阿吽阿第一」に就いては、其の意義を述べることをさしひかへておいたのであるが、更に考へるに、大略ながらも其の意義を述べて、「阿吽阿第一」を看る人の栞として殘し置くのが、寧ろ大なる誤解の豫防として得策であらうと思はれ、本日茲に「阿吽阿第一」特に阿吽阿教の據つて

立つ基礎であり、教理の樞軸を成す「智」五項中の「第四項智」及び「第五項智」に就いて簡單に演べる次第である。これが「阿吽阿第一」に就いての予の最初の講演であるが、又今後は一般同行者と共に、それに就いての言説を遠慮する考であるから、恐くはこれが最後であらう。

本來言語文字の企て及ぶべからざることを敢て試みるのであるから、冀はくば聞く人、言語の末に拘泥することなきやう豫め注意を促して置く次第である。

「智　御自愛御自處の妙動」。阿吽阿の御自愛御自處こそ寔に阿吽阿の無始無終・無邊無涯に彌る御存在の全意義である。此の全意義と申すことは、無始無終・無邊無涯に

彌る唯一者は、御自愛御自處のみで、其の他には何ものも無いと申すことである。御自愛御自處は、意志的に觀た御存在であつて、それの外に顯はれた動的御存在が如動卽全一活動である（下に詳かなり）而して全一活動は、其の活動機關として全一自己同一が、部分的無臭無色智性（生成性の原理）として、自己の內に連鎖活動（自律自助、交互扶持の原理）することによつて行はれるのである。此の機關の機構を了解に便宜のため、各自が假りに心裡に於て、全一阿吽阿の該總し給ふ萬境と、部分的智性が、部分として當然稟有する萬境と、各々同極異極、或は牽引し、或は反撥する相關關係に類する運動を想像し、或は時計細工の如き大小齒車仕掛に類する運動を想像するもよろしからうが、全機關の動く原動

力的意志は、御自愛御自處、卽全一活動本性（阿吽阿經（以下略す）一三二頁一、二行）卽統一原理（一三二頁一、二行）卽一切知識の原型（自三六頁四行至三七頁二頁、自一三二頁六行、至一三三頁五行）卽人道一般の原理（自一六頁一行至二一頁四行、一三二頁三行乃至五行）であつて、之に因つて部分的智性の連鎖活動が行はれるのである。但しこの妙動は、何所迄も阿吽阿の御內證であつて、後に述べるであらう永久幸福の妙境と同樣に、部分的現象界個性の固より認識し得る限りにあらず。從つて言語文字の及ぶところにあらず、唯明らかなる智性のみ能く之を直觀し得るのであるから、妙の一語に盡きるのである。必ず言の末に拘はることなかれ。

御活動が御自愛御自處を充實するのであつて、御自愛御自處と妙動とは、異稱同義

である、卽無窮に彌る唯一御存在である（三頁二行）我等の日日禮拜し奉る阿吽阿である（一三頁二、三行）現象界萬有の實相である（自一一七頁五行至一二八頁三行）無始無終・無邊無涯に彌る阿吽阿の本體である（三頁二、四、七行）現象界萬有の終に歸還すべき言語に絕したる幸福の妙境である（自四五頁六行至四六頁一行）

連鎖活動する無臭無色の智性、其の連鎖活動中、其の或ものが（一或は一以上數の多寡に拘らず）自己稟有の狹義自由に委せて（三一頁七、八行）偶々萬境該總阿吽阿の或境に偏倚（個性の偏見我執の本原）することあり。滯ふること久しふして、其の境自己具有の相應境に響應し、それが旺盛發達して、其の境遇現象化したのが現象界萬有個性の始である（四三頁二、三行、七〇頁六乃至八行、一二九頁二乃至四行但し連鎖活動する智性は、必ずしも悉皆現象界に墮すものと觀るべきではないのである。寧ろ其

の大部分は、無始の始よりこのかた、今もなほ無臭無色にして、言語に絶する阿吽阿の妙境にあつて、活動享樂してゐるものと信ずるのである。

此の如く或境に偏倚して、始あり、終ある現象界に墮したる智性は、其の寄る所の境遇に特殊なる性・能卽ち箇々欲・箇々機能を兼ねたる個性として假の姿を現はし、爾來箇々欲を趁うて輪廻流轉する有様は、「講演筆記」個性の中間期に見る所の如し。是れ經文「部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す」に應ず。

「因りて」の意義は、一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展する次第は、卽ち御自愛の妙動に因りて起る向上發展なりと示されたのである。御自愛御自處の妙動が

化成現象の直接原因なりとするのでは決してない。化成現象の直接原因は、前に述べし通り智性が其の稟有する狹義の自由（主命を帶びて他國に使する者中途にて休憩する自由の類）に委して或境に偏倚し、久しく偏境に滯りたる事實がそれである。

如上化成現象する直接原因と、その發展する動因は、御自愛御自處であるといふことを、明らかに區別して了解するにあらざれば、全體系の理解上疑惑を惹起する惧があるから、特に玆に讀者の注意を促して置く次第である。

連鎖活動中の智性、偶々偏境に寄りて現象化したりとは雖も、其の實相は、無論全一活動本性（一三一頁五、六行 一三二頁一、二行）であるから、其の實相たる全一自己同一は、固より御自

愛の外に漏れるべきにあらざれば、御自愛は常に自己同一體たる萬有の上に光被して、無臭無色連鎖活動の妙境へ進展・向上・引導し給ひて息むことなし。箇々欲を趁うて御引導（一三九頁四行）に背く場合は、必ず廣き意味での御愛・因果則によつて制節反正せしめ給ふ（自四五頁六行至四六頁一行）がゆゑに、現象界萬有は知らず識らず御自愛に感化し、向上・進展するのであるが（自七七頁一行至七八頁二行）斯の如き間に個性は、いつとはなしに御引導に感じて之を御慈悲と崇め仰ぎ、只管依り怙むやうになるのである。未だ唯一御存在阿吽阿を悟らず、多くの場合に錯覺して迷信に陷るとは雖も、人智を超越する靈性に依賴する信仰心が、益々個性の進展・向上を促すのである。是れ經文「乃ち部分界萬有は、因果の御則に

順ひて化易・推移し、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展・向上する所の根本智妙動の連鎖なり」に應ず。

凡そ愛なるものは、幾多名目にて稱られるが、中に就きて自愛に勝り、より切實なるものは他にあるべからず。されば普遍恒常切實なる全一御自愛は、自己同一智性たる萬有の實相に感應し、知らず識らず現象界個性は進展・向上し、遂に靈性を意識して御慈悲と崇め仰ぐに至るは、洵に當然の成行である。たゞ憾むらくはこの間にあつて、御慈悲の出る所を錯覺し、種々僞宗教迷信に陷ることであるが、それも御導きに依り、更に一段進展・向上して（二九頁三行乃至五行）遂に僞を棄てゝ眞に就き（自一四五頁三行至一四六頁四行、自六八頁五行至六九

頁三行　豁然として阿吽阿の有難さ勿體なさを、染み〳〵感謝して四、五行一向中和統齊の御道、御愛御引導に順ひ奉り、偏見我執を捨離して中を守り、御因果則の制節反正の賜に依りて遂に正位を逸せず、自律自助・交互扶持亦圓滿和同して、最初一境に偏倚して無臭無色の妙境を逸せし智性、茲に到つて割符の合ふが如く、復た根本智阿吽阿に契合完全一三七頁四乃至七行して、永久幸福の妙境に安住するのである。是れ經文「故に萬有は、此の中和統齊の御道御愛と、御因果則の妙に因りて推移・進展・向上して、遂に根本智に契合完全す」に應ず。

「智　個性不二。部分界の箇々は、極微も其の構成も悉皆智性卽ち智、是を以て箇々

は必然活動す」。全一自己同一が、部分的無臭無色智性として自己の内に連鎖活動することは、前に述べし通りである。故にこの連鎖活動するものは極微なると、極微によつて構成せられたる組織體なるとを論せず、必然に悉皆智性である。妙動が動的唯一御存在前になる通りに、自己同一智性の動的存在は連鎖活動である。卽ち個性交互扶持の原理である。乃ち智・個性不二の證明である。

箇々とは、全一活動機關として全一自己同一が、部分的無臭無色智性として連鎖活動する部分的箇々たる智性の意味にして、未だ一境に偏倚して其の境の屬性を帶びるに至らざる所の純智性の一ッ一ッのことである。

「箇々は、箇々に必要の箇々欲箇々機能を稟有す」とは、連鎖活動する部分的なる智、性、偶々萬境該總阿吽阿の或る境に偏倚し、滯ふること久しふして其の境現象二、三頁四行したる後の一ッ一ッのことにして、其の一ッ一ッが現象同時に該境の屬性、欲と欲を充す機能を賦けるといふのである。

「箇々欲・箇々機能を賦けたる箇々は、智性たると與に個性」とは、連鎖活動する箇箇は、本來無臭無色の智性（個性の實相）であるが、前に述べし通り現象して欲・能を賦けたるにより、もはや純なる箇々智性に非ず、欲・能に蔽はれたる假の姿四三頁二、三行であるから、之を區別して個性と稱へるのである。

「箇々欲允に中和を得て智性明らかなる個性は、卽ち全一の部分的顯現」。前に述べし如く、一境に偏倚したるに由り其の境現象すると與に、該境の屬性欲・能を賦けたる個性は、自己存續欲と、其の欲を充たさんための能力を發揮するのは、境遇自體の持前であるから必然ではあるが、適度を踰ゆれば、交互扶持する智性の本性に戻りて偏見我執となるのである。個性は、其の進展程度の低ければ低きだけ、それだけ現境遇執着欲旺盛にして、御引導の感應が遲鈍である。然れども人界迄進展・向上したる個性は、一旦豁然として阿吽阿の無限愛に感激し、衷心阿吽阿に禮讃謝し、身は現象界に在りながら、箇々欲洵に適度を踰へず 一一一頁二行乃至七行 智性內に明らかに、偏見我執を

捨離して交互扶持圓滿和同するに於ては、是れ全一の部分的顯現である。

自律自助・交互扶持は、中和統齊の御道である。故に阿吽阿教行者は、阿吽阿の無限愛に則り、他を憎まず他を怨まず（自一四三頁四行至一四四頁一行、四五頁一行乃至五行）或は諫め、或は教へ、或は導き、或は扶けて、どこまでも人道を盡すのが、中和の御道であり、阿吽阿教行者の本分である（四五頁一行乃至五行）

自律自助・交互扶持は、中和統齊の御道であるから、個性の常に實踐躬行して、決して窮することのあるべからざる正道である。此の道は屈從を善とするのでは無論ない、偏見を捨離して自律自助し、交互扶持して、個人の間にも、國際間にも協和する

道である。暴力に對してさへも或は諫止し、或は訓戒し、或は制止すべきは勿論であるが、その餘裕なき場合に於ては、之に抵抗して自己を防衛することは正當である。尤も君父に對しては、如何なる場合に於ても唯忠孝あるのみである（五一頁四行乃至八行）

「智性は、根本智を自覺し、靈界に感應し、箇々機能と協作用して對象を認識す」。夫れ阿吽阿は、無始無終・無邊無涯智である。個性は、智性と箇々欲・能の合同である。此の無始無終・無邊無涯絶對智を個性の立場にあつて認識せんとするは、假令ば算數に依つて無始の過去、無終の未來時間を計算せんとするが如く、尺度を以て無邊無涯空間の廣袤を測量せんとするに似たり、安んぞ功を奏することあらんや。

無始無終・無邊無涯絶對智は、唯だ御自愛御自處妙動精能、箇々欲の蔽ふところなき明らかなる智性のみ之を感情的に直覺し得るのである。是れ經文の「智性は、根本智を自覺し、靈界に感應し」に應ず。

之に反して對象認識は、現象界の萬有が、其の相對關係に於て互に認識することである。則ち認識は、認識者が被認識者の有する差別的特質屬性を認識するのであるから、御自愛御自處絶對精能、智性のみにては、對象の差別的特質屬性を判斷する法式が缺けてゐるので、差別界心身の機能と協作用して後に判斷形式が調ひ、玆に始めて認識可能になるのである。假令ば延長あり、抵抗ある對象は、眼で視、手に觸れて後

に智性はその特質を判知し得るが如きがそれである。是れ經文の「箇々機能と協作用して對象を認識す」に應ず。

認識は、箇々機能の協作用を必要とする形式判斷なるがゆゑに、何程其の判斷が精密を盡し何程範圍が擴大しても、それに依つて得る所の知識は、相對的現象界の外には一歩も出で能はぬのは必然である。物理學、生物學、哲學等の諸科學は、其の進歩實に顯著なるものがあるが、科學に依つて絶對を理解することの不可能なるは前述の理由で明らかである。絶對は明らかなる智性のみ能く感情的に直覺し得るのである。

○如上絶對は、明らかなる智性の直覺する所であつて、學に依つて理解し能はぬこと

は、假令ばこゝに一個の時計あり、其の內部構造は多樣の齒車や車軸や螺狀鋼紐等より成り立つのである。而して學者は、其の構造を精細に調査して秒・分・時針の運動は螺狀鋼紐の彈力に基因し、其の彈力は、人の之を卷締めたるに基く迄は精確に理解し得べしと雖も、焉ぞ鋼紐を卷締めし現象的手の奧に存する絕對的原動力意志を認識し得んや。

前に全一活動全機關の動く原動力的意志は、根本智御自愛御自處、卽全一活動本性、卽統一原理、卽一切知識の原型、卽人道一般の原理であると述べて置いたが、此の根本智御自愛御自處は、箇々欲の蔽ふところなき明らかなる智性の感情的に直觀するところであるがゆゑに、根本智が人道一般の原理なることが明らかであり、科學に依つて原動力的意志の活動狀態が具體的に整然判明するから、根本智が一切知識の原型なることも亦明らかである。人道一般の原理であり、科學知識の原型であるから、それは統一原理である、卽ち全一活動本性である。

斯の如く全體研究の結果である一切知識を統一する阿吽阿教は、眞の宗教である、所謂理智的宗教である。之に反して其の信條教理と、科學知識とが枘鑿相容れざるものは僞教である。宗教の眞僞を知らんと欲せば、其の教理に全體を發展せしむる可能性が有るや否やを査明すれば、眞僞の區別は直に判明するであらう。

偏見我執を捨離した明らかな智性が、阿吽阿の御自愛を自覺して、その無限愛に感激し、衷心阿吽阿に禮讃謝するところに智性、根本智の合致があり、南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿と斷へず禮讃謝を意識するところに、覺者の眞の宗教生活があるのである。（自一四三頁四行至一四四頁二行　自一七八頁二行至一七八頁八行）

阿吽阿の御愛は、萬有に洽く常に萬有を御引導向上せしめ給ひて息むことなきがゆゑに、個性は無意識ながら感激感謝したり、御導きに順ひて、交互扶持人道を實踐するに至るのである（自七四頁八行至七六頁八行）故に所謂愚夫愚婦も、能く御導きに順ひて安樂平和に生活してゐるものも數多あるのであるが、惜むらくはこの輩は經驗範圍の狹きと、學問

知識の淺きがために、多くの場合に道理（中和の御道と因果則の妙理）に由らずして、私欲を充さんと求めたり、空想を恣にして無意味の暗示に搖がされる傾向がある。この三つのものは相倚相携へて、御導き錯覺の因を增長し、人を迷信に陷れて、悠久に邪道に惑はしむるものである。洵に慨歎の至りに堪へざる次第である。されば如上素朴なる善男善女は、常に心を平和に持ち、かりそめにも道理を脱れて私欲を充さんと求めず、一身を唯一御存在の御自愛に託して、愼で御導きに順ひ奉り、屢々經典を讀誦して阿吽阿の無限愛をはつきり悟り、南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿と常に禮讃謝を意識して、現世安樂、永久幸福の妙境に合ひ奉らんと念願することが最も肝要にして、且つ焦眉

の急であることを、此の機會に懇切警告する次第である。

認識は、偏見我執を捨離して、自律自助・交互扶持する人道の栞である。認識せずして、理智的に人事を實行することは、勿論不可能である。（自三六頁七行至三七頁二行、一一六頁二行乃至六行）故に人は、須らく正しき經驗と、學問上の知識を能く處世に適用し、一般人道の實踐圓滿和同を期して生涯努力すべきものである。

根本智を自覺して、常に禮讃謝を意識し、靈界に感應して御導きに順ひ、偏見我執を捨離して中正に止り、正しく對象を認識して人道一般を盡し、自律自助・交互扶持圓滿和同して、現世安樂・永久幸福を約束するものは阿吽阿教である。而して『阿吽

阿經』は、其の順路の指針である。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

昭和十二年四月十日印刷
昭和十二年四月十五日發行

定價金拾錢

著作者　東京市芝區伊皿子町二十六番地　富岡俊次郎
發行者　東京市芝區伊皿子町二十六番地　富岡清行
印刷所　東京市芝區櫻川町十一番地　金羊社
發行所　東京市芝區伊皿子町二十六番地　財團法人　阿吽阿會

不許複製

終